

平成元年度 国立大学学部・附属学校等 教官海外教育事情視察派遣（A団）に参加して

加 田 紀 機

1. は じ め に

まず今回の海外教育事情視察参加の機会を与えていただいた文部省や学校当局及び直接・間接にお世話頂いた関係の方々、並びに留守中子ども達をしっかりと守り、国内より心強いサポートをしてくれた同僚諸君に心より感謝の意を表したい。

私にとって今回の海外旅行は8回目、期間の長さでは14カ月間、56日間、1ヶ月間に次ぐ4番目（25日間）で、団体旅行としては2回目、民泊を伴わない海外旅行は今回が初めてであった。

海外旅行は、期間の長短に関わらず自分の身の回りを含め、大げさに言えば日本を客観的に見ることができ、日本の良さや弱点分かる貴重な機会だと、旅行に出る度に私は感じているし、もちろん今回もそのことを強く感じた。特にこの度初めての東ヨーロッパでは自由化の波が大きくうねり出す直前のチェコスロバキアの教育事情を視察できたことは日常その方面の情報が少ない私にとって貴重な体験であった。

海外視察関係の当紀要への投稿は先輩諸氏によりいずれも教育事情のみに焦点を絞った格調高い内容であったが、本稿では出発までや、余裕があれば事後の様子等を交えた訪問国（チェコスロバキア、カナダ）の教育事情の一部を紹介したい。

2. 事 前 研 修

5月26日付で下記の視察団野派遣の決定と事前研修の通知が6月初旬にあり上京した。

事前研修は東京青山会館で2日間にわたって行われた。内容は班編制、事務分担、視察国の教育事情及び調査事項の検討、渡航手続き等であった。

団	氏名	備考	出発日	10月20日	主要訪問国	チェコスロバキア、スイス、カナダ
A	加田紀機	中学校	帰着日	11月13日	従訪問国	オーストリア、フランス、アメリカ

班編制は文部省の方ですでに出来ていてコピーが配られた。それによると一行は団長（黒川征文 文部省高等教育局私学部私学行政課長）、JTB添乗員1名を含む30名（内10名が女性）で、10名ずつの3班に編制されていた。小生は3班で番号は28番であった。団員は特殊学級、養護学校は皆無で中学校、小学校、幼稚園の副校長、副園長、教頭、～主任とかが多く私以外は多士済済のメンバーであった。大学課教育大学室のスタッフの進行で自己紹介の後早速事務分担に移ったが、驚いた事に、3班の私の欄には「渉外」とすでに印刷されていた。もう一人は2班の琉球大附属中O教諭（英語）、1班は団長付きのT添乗員である。何故そうなったのか質問してももう後の祭りであった。5月中旬、1年生の家庭訪問先に副校長より、渉外係を受けるかどうか至急本省に返事をし



Prague & the bridge of Charles IV over the River Mlýnský náhon
 プラハの橋とプラハ城
 モルダウ河にかかる橋とプラハ城

記録6人、会計3人、写真3人と各班の班長3人（1班は副団長を兼ねる）を一部の班に偏らないように決めた。早速系毎に分かれて、出発迄に何を、又旅行中や帰国後にすべき事について話し合った。初対面同士ながら同じ目的を持って仕事を始めると連帯感も次第に湧き、その場では海外研修の気分が徐々に始まった。（学校に戻るとそんな気分に入る間もなく、事前準備の時間もあっという間に過ぎてしまったが……。）

私の出発までの仕事は、①団員名簿（英文）の作成と印刷、②教育行政機関、学校訪問用の2種類質問書（和、英文）の作成＝後出資料ア、イ参照、③現地教育関係者との親睦会の招待状（英文）、④現地教育関係者の芳名録（英文）の作成、⑤現地訪問諸機関への礼状 etcであった。特に気を配ったのは①の名簿でローマ字の綴りを間違えないよう神経をつかった。趣味に「大極拳」の団員がいて、その英訳が手元の辞書になく、東京と大阪の在日中国領事館に訪ねてもわからず、最終的には同じ渉外担当の琉球大附属のO教諭が近くの米軍基地で聞き「CHINESE SHADOW BOXING」とやっと分った一幕もあった。この名簿はヨーロッパとアメリカ大陸の教育関係諸機関や一部の在外公館へ配るものなので日本の印刷技術やセンスを問われるということで、市内のT印刷に相談にのってもらい書体やインクの色、用紙を決めた。インクは従来の黒をやめ柔らかい感じのするセピアにした。（残念ながら、このような配慮に気づいた団員は一人もいなかった。）

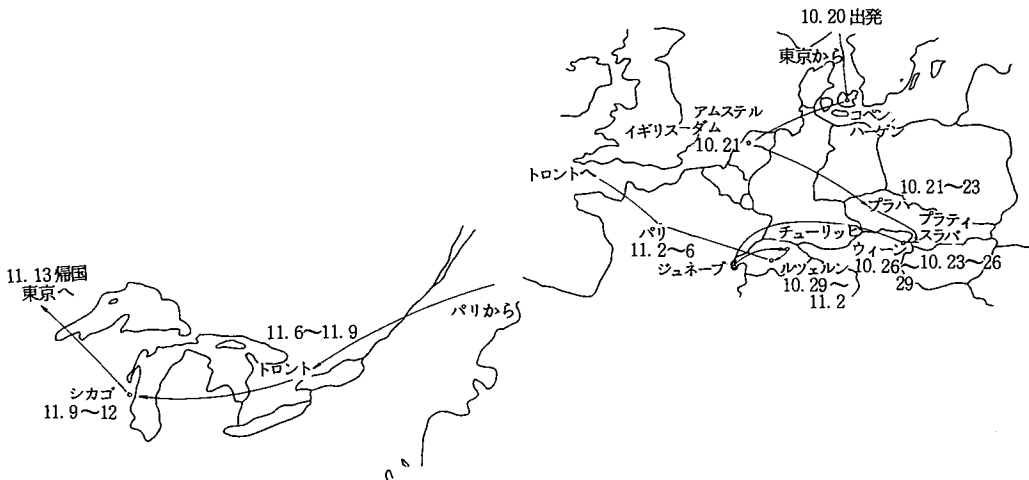
養護学級の諸行事に加え、夏休みに入っても県総体、全国中学校卓球大会、次男の大阪での眼の検診、アメリカの知人の来松等があり公私共多忙のまま夏期休業もあっという間に終わったが、数ヶ月間御無沙汰していたコンピューターにワードプロセッサのプログラムを入れて仕事をするのは楽しかった。まごまごしている内に出発当日を迎え、午後になってもまだ③の招待状を印刷している有様であった。しかし、今回の様な仕事をする場合、時間的にも、機能的にも、経済的にもワードプロセッサ無しには考えられなかった。

なければいけないがどうしますか？という電話が入った。全国から大勢の先生方がおられるのに、自分に渉外係とは寝耳に水であった。私の返事は①丁重に断わる、②グループに分かれて養護学校とか特殊学級を訪問する機会があれば補助員くらいはできる、であった。海外派遣の調査書の英語の日常用語と教育用語の欄の自己評価をA（自由にできる）B（なんとかできる）C（できない）の内、Bにしたのが間違いのもとであった。その他の係は自己申告制により庶務8人、進行3人、



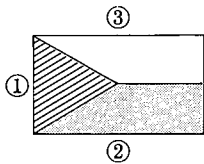
プラハ城を写生する子ども達

3. 行 程



結団式の直前に最終訪問地の変更を知らされた。それは出発の数日前にあのサンフランシスコ大地震があったからである。急拠シカゴに変わった。早速学校に連絡しようとしたらJTBからすでに連絡済みとの事だった。復旧活動のさなかののんきに教育文化施設の見学でもあるまいから当然の事である。

4. チェコスロバキア（国旗の3色は①スロバキア、②ボヘミア、③モラビアの3地方を表している）



世界でも最大規模を誇るオランダはスキポール空港の端の端までリムジンバスで連れて行かれ、やっとリヤエンジンのジェット双発機イリュージン60型（DC9によく似た機）にたどり着いたのは予定よりすでに3時間も遅れていた。チェコ人らしき乗客が3~40人位とわれわれ日本からの一行30人の

他はアムステルダム自動車組合の観光団体が主な乗客で、人数もわれわれとほぼ同じでほとんどが夫婦連れで賑やかであった。

ボーディングパスが無く、禁煙、喫煙席の区別も無く、全席自由席でこれまで慣れ親しんできた米国製の飛行機に比べ、このソ連機は内装はもちろん仕上げも雑、乗務員は不愛想で食事もあり良くなく食器も質の悪いプラスチックで、その上窓から見える主翼のリベットの鋸頭が丸く、2~3のへこみが見えたりして、この機が果たして安全にドイツ上空を通過し無事プラハに到着するかどうかスリルがあった。この百人足らずの乗客の通関に恐ろしく時間がかかり、これが体制の違いからくるものかなと思った。しかしこの待ち時間も例のオランダの自動車組合の団体のある奥さんが隣に座り英語で話しかけてくれたおかげでいろいろな情報は入るし、まったく退屈しなくてすんだ。

入国でやや減点があったもののCEDOK（チェコスロバキア国営旅行公社）差し回しのバスはフランスはルノー製の最新型で通訳のMRS. ヤヤさんは知的できれいな英語を話し、ホテルは10日前にオープンしたばかりで、パーツラフ広場からやや離れたところにあるパレス・ブラハは清潔で従業員の教育も行き届いていて快適であった。鍵は流行の磁気カード式でTVは信号の方式が異なり日本のそれと比べると比較にならないほど鮮明な映像であった。

チェコスロバキアは人口15百万人。国土は日本の3分の1でチェコとスロバキアの2つの共和国が連邦を形成し、公用語はチェコ語とスロバキア語である。マルクス・レーニン主義を（少なくとも89年11月上旬までは）標榜し、首都はプラハで人口は130万人。この国の代表的な作曲家スメタナによる曲「モルダウ河（現地名はプラタバ河）」はプラハの西を流れ、特異な流水避けを伴ったチャールズ（現地名カレル）Ⅳ世橋によりプラハ城とつながっている。第2次世界大戦の被害もあまり受けず、街全体がよく保存されていて「中世の宝石箱」と呼ばれている。

1) 国民生活

この国の実状についてはあまり情報が無いので少し細かいところを述べてみよう。在プラハ日本大使館の寺本氏やCEDOKの通訳嬢によると、この国は他の東欧諸国に比べると、土地や住居の私有が許され、車も国産車のシュコダならいつでも手に入り、消費生活もまざまざの水準を保っている所以で国民はどちらかと言うとおとなしい。従って大きな動きは無いであろうと言う予測であった。

われわれの同業者である当地の教員の平均月収は28千コルナで3LDKの平均的な家賃が月6百コルナ、4人家族の平均的食費が月千コルナ、国産車6万コルナ、外車は2倍以上する。ガソリン1ℓ8コルナ、軽油4コルナ、国産テレビ8千コルナ（日本製2万コルナ）、トマト1kg8コルナ、肉1kg20~40コルナ、生乳1ℓ3コルナ、プラハ市民の50%が持っていると言われる別荘は10万コルナ（20年前は15千コルナ）。一般労働者の平均月収が28千コルナで教員と変わらない。国民の大学への進学率低さと、男子の教職に対する人気が無いのはこの様な理由による。給料は政府との5年契約で3ヶ月毎に見直されることになっているが、実質はほとんど変わらないので、ちょっと外国製品を購入すれば生活はあまり楽ではない。以上の様な給与体系と保育所が完備している為、一般に共働きの家庭が多い。単純には比較できないが、私の観察では、完備した公共施設、医療費や大学までの教育費無料制や一戸当りの住宅の広さや質、それに生活に必要な食料などが比較的安いので基本的な生活水準はチェコの方が所得水準膨れの日本のそれよりも高いように思った。ちなみに円とチェコの通貨コルナの実勢レートは約10円（公式レートはこの2倍以上）で外国人旅行者はドルショップでドルしか使えないことになっているし、また入国時に両替した時に発行される外貨交換証明書が無いとこの国からの出国はできない。

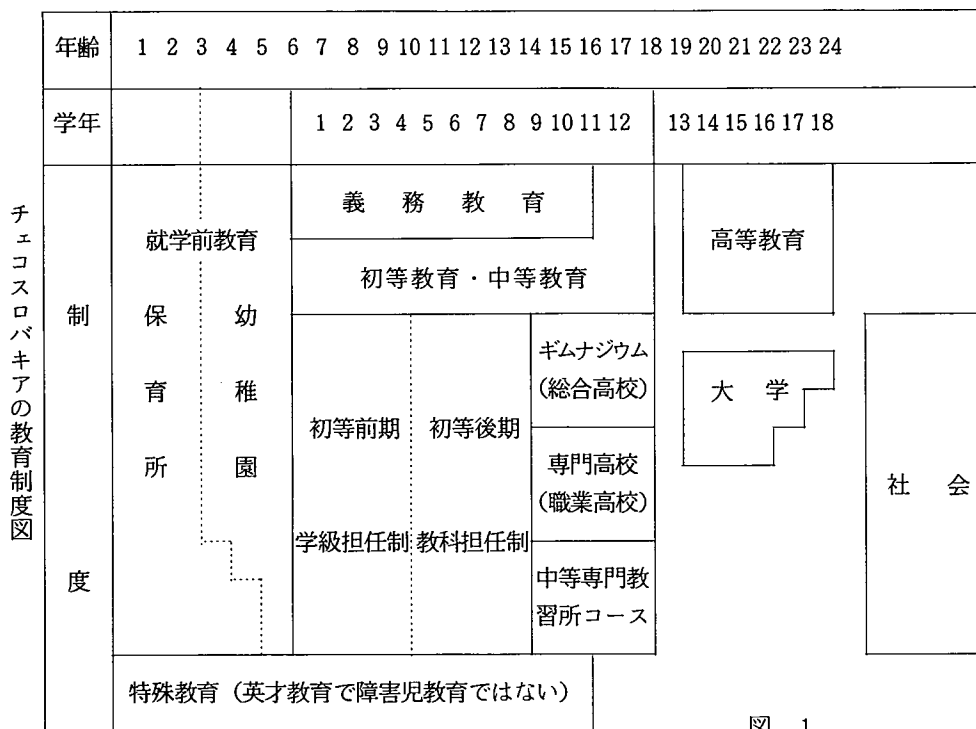


夕方カレル橋に集ってきた若者達は健全そのものだった。

2) 学 校 訪 問

この国での学校訪問は、この国第2の都市でスロバキア共和国の首都である人口50万人のブラチスラバ（オーストリアの首都ウィーンまで車で1時間足らず）で始まった。

まず、ブラチスラバ市第2区の教育委員会を訪ね、女性教育長のベシコバ博士の当地方の教育に関する一般的な説明を聞いた。これは彼女とスロバキアの文部省の役人及び第2区の指導主事の各1名がレーニンの胸像が飾られてある壇上に陣取り、われわれ訪問団はフロアでスロバキア語→英語→日本語という順序で、はなはだまどろっこしく且つ堅苦しい感じの説明会であった。しかし、フロア左手に陣取っていた女性の指導主事達が中休みの時トルコ風のコーヒーを出してくれたりして、時間が経つにつれ和やかな雰囲気になっていた。これも国家体制は異なるものの、目的を同じくする同業者のよしみだろうか。説明の要点はこの国の教育制度はチェコとスロバキアの両国の文部省が教育を司り、その法的根拠は憲法と教育法、及び大学法である。また少数民族にも不公平にならないように授業料教科書等の教育費は無償等々であった。（日本の中央集権型に似ていた）



ピオニエール

この制度は放課後の生徒の指導するいわば社会教育の制度で、日本のクラブ活動的内容で、指導時間は毎日8:00～20:00の間。

- ①保育所（生後3ヶ月～3才まで1日8コルナ）②幼稚園（3才～6才まで、就園率75%）③

小学校義務教育（4年生迄は学級担任制、以後8年生迄は教科担任制で多くの選択教科の中に外国語やコンピュータ等も含まれる）④以下後期中等教育のギムナジウム、専門学校等、⑤大学があり、年齢や学年各校種別の関係は図1のようになる。

このうち私たちがブラチスラバで訪問出来たのは幼稚園と小、中学校であるが、こちらでは小、中学校が一つの校舎つまり一つの学校になっていた。教育委員会での全体説明が終わると3班に分かれて2日間にわたっての視察が始まった。この班は希望する見学先別の任意の班ではあるがこの場合、渉外係の希望は必ずしも通るわけではない。初めての訪問先はヤスレ マルテスカ シュコラ幼稚園であった。10名足らずの日本からの訪問客と同じ数の幼稚園児がそれぞれ民族衣装に身を固め一人ひとりにやや緊張した面もちで何十年ぶりの暖秋で汗がにじみ、まばゆいような太陽の光が差し込む園の廊下で私たちを迎えてくれた。そして一人ひとりに手作りの作品をプレゼントしてくれた。見学の途中で「ドブレゼン！（こんにちは）、ドブレゼン！」と声をかけながら20人足らずの幼稚園年長児が園外学習から帰ってきた。私たちも園児達の明るい、天真爛漫な出会いに思わずつられて「ドブレゼン！」を連発していた。どの部屋も明るく観葉植物や園職員の手作りの装飾品などが豊富に配され、建物も園内外の施設設備も清潔さにおいてもこれまで私が日本で見たどの幼稚園よりも立派であった。この訪問では当地コメンスキー大学日本語科の先生や学生が2名同行、通訳やこちらの用意した調査書の（英語による）回答に協力を得、大いに助かった。

翌日訪問した学校はザクラドゥナ（国民蜂起）学校では7年生の美術（男女23欠席3）女教師の指導で日本でもお馴染みの曲ユモレスクを聴いて、その感じを抽象表現をするという課題に取り組んでいた。当校の評価は5段階の相対評価で1が最高。ただし抽象表現等の場合は教師の主観による絶対評価とのことであった。途中より退席し次は6年生の音楽（男女25人）女教師の指導で生徒の活動を中心にしてリズムの指導から3部合唱へと進んだ。そして6年生の木工（女のみ12）指導は女教師。与えられたデザインの鍋敷の設計書をコピーし、それを製作中だった。技術的なことは実に大ざっぱで教師もその当りは無頓着の感じで木工を体験することが最大の狙いのようにであった。同じクラスの男子はその間、校地の清掃活動をしているとのことだった。次に7年生の数学（男女24）女教師、OHPを利用して錯角、同位角など図形の学習を生徒の発表活動を中心にやっていた。三角定規などは技術で使うような大きな物を個人所有で使用、筆記具も予想に反して実に豊富であった。最後に8年生の体育（男のみ18）明るい日差しのもと、初めてで最後の男教師による芝生のフィールドでのハンドボールの試合をしていた。この学校の教職員数は校長を含め56人で内男子は2人、教員はこの体育の先生ただ1人であった。当地教育委員会の指導主事さん達との懇親会の席でも話題になったが、この



ブラチスラバのボヘミアングラスのドルショップ国外発送サービスはなしの親方日の丸商法。ただし製品は素晴らしい

国の学校の偏った職員構成の見本みたいな学校であった。生徒の服装や髪型は思い思いで特に女子は低学年からピアスをしたりネックレスやブレスレットをしている者が多かったが学習態度は自然で、見ていて気持ち良かった。察するところ身なりなど子どもの自然な装飾本能(?)を満たすことは教育の本質に反することではないので学校は制限していないようであった。宴会の席でこの点を正してもけげんな顔をされるだけだった。これはスイスでもカナダでも同様であった。

5. カナダ(国旗の意匠は国樹の楓の葉、国土は日本の26倍で 1/3 が森林、人口26百万)

公用語は英語とフランス語（公の書類、及び表示類はすべて最低この2ヶ国語併記になっている。）

1) トロント市（オンタリオ州）の教育制度の概要

ここカナダの教育制度はスイスやアメリカと同じように州の自治に完全に任せてある。このことは同じ州内でも自治体が違えば教育制度も少しづつ違っているとの説明であった。このような制度的風土の上に建国以来の伝統である移民政策と多文化主義（ここが同じ移民国家でもアメリカと異なる）を取っているので教育制度も教授スタイルもチェコや日本ではとても考えられないものである。



(トロント市教委の標語)

10才になると本人や保護者の希望で全ての教科を英語でやるのかフランス語でするのかを決定しなければならない。だから教科もフランス語の数学、英語の社会といった具合である。その上4人に1人位の移民の子弟（多い学校では17ヶ国からの移民）にそれぞれの母国語を1日40分間指導しなければならない等、言葉一つ取っても大変である。

オンタリオ州の教育制度	年齢	4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18																
	学年	JR.	SR.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13		
	制	幼稚園	幼稚園長	小 学 校						中 等 学 校								
				義 務 教 育										後期中等教育				
度	初等前期教育			初等後期教育			中等教育											

図 2

2) 学 校 訪 問

雨の中、1番目に訪ねた学校はワイノナ・ドゥライヴ中学校ではまず私が事務室で訪問の趣旨を告るとコールマン髭を蓄えたギブソン校長が出迎えてくれ、荷物を校長室に置き早速視察を開始した。この学校では7、8年生の担任は国語（フランス語か英語）と数学を教え、他の教科は専科制であった。音楽は弦楽器中心でベートーヴェンの第九の練習をしていた。この国では珍し

く一斉授業の形態であった。9月新学期に入ってから始めたにしてはうまいような気がした。次に訪れたのは校舎続きのマクマリッチ小学校である。ギブソン校長と記念撮影をしている間にレグラディ校長（ハンガリーからの移民）が待ちかまえていた。彼女の案内で駆け足で校内を巡った。ここは保育部、幼稚園から小学校6年まである学校で、中学校と棟続きになっているのはカナダでも珍しいとのことであった。ここでは一斉授業には一度もお目にかかれなかった。どの教室もグループに分かれての学習であった。もちろんどの学年、どの教室にも黒人系、中東系、東洋系、ヨーロッパ系の子ども達が入り乱れて学習していた。次の日も雨の午前中1校、午後1校を見学した。その中のスワンシー中学校は1890年創立で学級数（JR幼稚園から8年生迄の10学年）は31、児童・生徒数は623人（男319、女304）、単純計算でも1学級当りの生徒数は20余りである。実際は7、8年生は30人クラスで学年が下がるにつれて1学級当りの人数はもっと少ない。教職員は51人（男性13、女性38）で、この中には校長裁量の雇用の補助教員4、5人を含む。1月前に転動してきたばかりというディクソン校長は女性、副校長も女性であった。補助教員は学習不振児や情緒に不安定な子どもに付き添っての個人学習の援助が任務で、もちろん給料は教育委員会から出る。そのほかにニューカナディアンに母国語を指導するボランティアや正規の教員が1日でも休むとその補充教員として教育委員から派遣されている教師など日本の学校と異なり学校教育に様々な人が携わっている。学級当りの人数もさることながら必要な個人指導はきめ細くなされていた。最後に図書室で先生方との懇談会を持ったが黒板にはENJOY THE DAY!と書かれてあった。これは我が附中の養護学級のモットーの英訳ではないか!と言うことで話題もよけいに弾んだ。

6. お わ り に

25日間にわたる貴重な教育視察でいろいろな事を考えさせられた。教育はそれぞれの国の文化的背景や風土、経済力、国民気質その他の上に成り立っているものなので単純な比較は出来ないが、今回訪問した3ヶ国で共通していたのは、教育の場は失敗が許される場であり、学校は弱い者が力をつける場であるとの考えに立っていた。各国共、教師1人当りの生徒数や学級当りの生徒数、障害者を配慮した校舎やその面積、充実した社会教育制度など、どれをとっても日本より一歩先んじていた。日本もここ数年の内に40人学級制がやっと完了し新指導要領による個人の特質や個性化を重視した教育課程での指導が始まるが、これらの目的を達成するためのハード、ソフト両面の関連法規の改定も同時に行わないとその実は上がるどころか先進国に更に水を掛けられてしまうであろう。21世紀を目指す我が附中新築案も旧規格の為、完成の時点で時代遅れになるかも知れない。消費税はあってもよい、教育にもっと積極的、総合的に対処して欲しい。明治のような教育に対する意気込みが今こそ必要ではないだろうか。



トロント市教委の幹部との懇談。話題は麻薬、エイズまで及んだ。

